

私にも  
言わせて!  
第38回

地域に根差し、血の通った  
公衆衛生を志して

途上国で医療活動をしたくて医師を志し、学生時代に「公衆衛生」に強く興味を持つようになり、今に至っています。現在、大好きな大阪で公衆衛生に携わっていますが、どこの場所で働くとしても、その地域に愛着をもって、血の通った公衆衛生活動を…そんな気持ちで、仕事に向き合っています。

「公衆衛生」との出会い

医学部卒業後、わりと早い時期に、公衆衛生の道を選択することは、比較的珍しいことだと思います。なぜ公衆衛生なのか、という質問を受ける機会も多いですし、最も多いのが「専門は何ですか?」という質問です。一般的にも「公衆衛生」という分野は認知度が高くないように感じますが、医療従事者の中にも、あまり知られていない、というよりもあまり興味もたれていない現状があることは、いろいろな場面で感じることもあります。

そもそも私が、「公衆衛生」とい

とした医師チームとして、他の職種とともに、全市的な施策の推進に取り組んでいます。また、エリア制としては、多くの医師は、24の各区に設置された保健福祉センターを兼務し、公衆衛生行政の第一線で、地域における健康課題の解決にも取り組んでいます。24区は東部・西部・南部・北部の4つの基本保健医療圏に分けられ、それぞれのエリア(医療圏)には、そのエリアを統括する医療監が配置され、エリア内における相互応援も図りつつ、区担当の医師とともに公衆衛生課題の解決に取り組む体制を強化しています。

私は現在、保健所感染症対策課

で感染症チームの一員として、感染症対策に携わっています。またエリアとしては大正区保健福祉センターを兼務し、西部エリアのメンバーとして仕事をしています。保健所と保健福祉センターを兼務することで、感染症領域だけでなく、公衆衛生医師として幅広い経験ができますし、このチーム制・エリア制により、それぞれのリーダー医師をはじめ先輩医師に相談しながら、日々の業務に取り組む

う分野や仕事に強く興味をもつようになったのは、医学生の間でした。もともと、途上国で医療活動をしたくて医師を志したこともあり、途上国ではどういふ医師の働き方があるのだろうか、といういろいろな先生方のお話を聞く中で、「公衆衛生」という分野で働く医師がいることを知りました。そして、最も強烈な印象を与えられたのが、ネパールの山村で結核対策を長く続けられた、故岩村昇先生の「ネパールの青い空」という本の出会いでした。その後、何度となくネパールを訪れるようになりましたが、そのことから、将来はどうかのタイミングで公衆衛生へ…と

ことができている、相談できる医師が多いことは、非常に心強く感じています。

感染症チームでは、結核やその他の感染症対策に取り組んでいます。私が、私自身は特に結核対策が業務の中心になっています。大阪市の結核罹患率は人口10万対39・4(平成25年)と全国で最も高くなっています。患者早期発見のための、高齢者やホームレス、外国人などハイリスクグループへの結核健診の実施や結核患者の適切かつ確実な治療に向け、服薬支援、DOTSカンファレンスやコホート検討会など、医療機関との連携を含めた結核患者管理を保健師等とともに取り組んでいます。

また、結核も含めた感染症発生時の積極的疫学調査や接触者健診の実施なども医師としてのリーダーシップが重要な業務です。さらに大阪市では、感染症対策課と保健医療対策課のスタッフで構成される院内感染対策プロジェクトチームで、多剤耐性菌による院内感染対策に取り組んでいます。これらの業務を通して先輩医師から多くを学ばせていただいています。

漠然と考えるようになりました。

「保健所勤務」へ

大学卒業後、初期臨床研修、大学院を経て大阪市保健所で働くことになったのですが、公衆衛生を志したものの、公衆衛生という分野は広く、また働く場所についても、国際機関や国際NGOなど海外のフィールド、大学、行政では国レベルから地方自治体レベルまで様々です。その中で、保健所で働いてみたい、と思ったひとつのきっかけは、大学院のころに地域の保健センターと関わりをもつ機会があり、保健師さんたちをはじめ行政スタッフの方々と仕事をしたことです。臨床研修を終えるころまでは、もともと途上国での医療活動に興味のあった私は、「公衆衛生」といえば「国際保健」、という意識がどこかにあったように思うのですが、公衆衛生の現場の第

「田舎のいいところ」がある

保健所で勤務するようになり、様々な職種のスタッフと連携して仕事をできるようになり、いろいろな仕事や考え方に触れ、視野も広がったと感じています。また、各種研修参加を通じて、他組織や他自治体の公衆衛生医師の先生方との交流からも、いつも刺激を受けて、日々の仕事のモチベーションにつながっています。さまざまな研修に参加することができ非常に恵まれていると感じますし、快く送り出し業務をカバーしてくださる職場の方々にも大変感謝しています。

臨床医ではなく公衆衛生の道に進むと決めたときは、迷いや不安がなかったわけではありませんが、いま、やりがいをもって楽しく仕事をしています。これまで様々な公衆衛生の現場で働く先輩医師の方にアドバイスをいただき、すべての出会いがいまにつながっていますし、自分は本当に公衆衛生が好きなんだな、楽しいなと改めて感じています。

かつて恩師に、「公衆衛生は、共同社会の組織的な努力を通して、



大阪市保健所感染症対策課  
兼 大正区保健福祉センター

津田 侑子

平成20年藤田保健衛生大学  
医学部卒業、22年淀川キリスト  
教病院初期臨床研修終了、  
25年より大阪市保健所勤務。  
26年大阪医科大学大学院(衛  
生学・公衆衛生学)卒業。

一線が、とても身近に感じられたと同時に、日本の現場について何も知らないことを感じ、保健所で働いてみたいと思うようになりました。そして、学生時代から前述の理由などで興味があった結核対策の現場を見てみたかったということ、医師としても公衆衛生医師としても未熟であるため、ある程度公衆衛生医師の先輩方がおられ、いろいろと相談し教わっていただきながら仕事をしたい、という理由から大阪市保健所で仕事に就くことになりました。

「大阪市保健所」の体制と業務

大阪市保健所の公衆衛生医師は、チーム制・エリア制を導入しており、チーム制としては、本庁や保健所において生活習慣病・母子保健・医療安全・感染症対策などの各施策別の専門チームに配属され、それぞれのチームリーダーを中心

疾病を予防し、寿命を延長し、身体的・精神的健康と能率の増進を図る科学・技術である」(CEA Winslow: WHO1949)という定義に立ち返り、現状やデータ分析を行い、そこに血を通わせた生きた対策へつなげる仕事をしてください」と言われました。折にふれこの言葉を思い出し、仕事をしています。公衆衛生医師の数は、そう多くはないですし、臨床に比べると珍しいキャリア選択だと思います。現状では、決まった道がなく、何が正解ということもないですし、ゴールドスタンダードはないのだと感じています。それぞれの道があり、最終的には自分の姿勢が問われるのではないかと思います。

ももとは国際協力といった方面から公衆衛生に興味をもった私ですが、いま、国内の公衆衛生の現場で働き、外国人結核対策などを通じて、国内であっても、国際協力ができる、と感じています。自分が働いている地域を大事にして、与えられた場所でその地域のために、地域の皆さまとスタッフとともに学び成長していきたいな、と思っています。